古典紹介・解説

皇甫府君碑②

橋本　圭風

さて二回目ですと、まだ〳〵前回の九成宮と何処が違うのか、はっきり書きわけられないと思います。

九成宮も皇甫府君碑も欧陽詢が七十五～八十一歳という晩年期に書かれたものです。

特徴としては線が比較的細く引き締まり、背勢で力強い書風です。また横画がかなり長いことで全体のバランスが保たれていますが、これは隷書体の筆法です。まずは原帖を良く観察しましょう。焦らず少しずつ練習することで徐々に身に付いてゆくものです。

長年何度も臨書していても中々スパッとは書けないものです。日々精進ですね！

集字聖教序②

畠中　香風

「集字聖教序（しゅうじしょうぎょうじょ）」は王羲之の真跡から文字を拾い集め並べてできた碑のため、文字に大小が生じたり、楷・行・草書が混在する等、全体として気脈の貫通がありません。

しかしそのアンバランスの表現こそがこの碑の最大の特徴であり魅力でもあると古くから評価されてきました。また、碑文中、同一文字が多数出てきますが、同じ字形の文字はひとつもありません。集字者である僧懐仁（えにん）のこだわりと苦労がうかがえます。

法帖をお持ちでない方は是非入手され全体の文字の変化を探りながら学書されると新たな発見が出来るかもしれません。